

月夜とオルガン Ver.2.1

北村想

耳を澄ましてみれば

ああ あれは蹄の音ケンタウルス

矢を放つ響き

北十字のはばたき

燃えろアンタレス

(コーラス) ♪おおミルキウエイ

おおミルキウエイ

このまま夜よ止まれ

オリエ

♪水平線の国ジパングに

黄河の大地から

海を越えてやってきた

運命の愛の物語

夜よ止まれ

時よ動くな 星よ

おまえたちの歌が聞きたい

(セリフ) 夏の風が私の魂を攫い、かいませた宇宙の果ての、その最後の夢のように、今夜は不思議な夜なのだ。歌った歌は全て、真実になってしまう。つぶやいた呪文はみんな現実となって現われる。そんな不思議な夜なのだ。

(コーラス) ♪おおミルキウエイ

おおミルキウエイ

このまま夜よ止まれ

銀河よ 光の橋よ

月の光で 星の生命が消えぬまに

やってこい ロマンسよ

流れを越えて やってこい

〈おおミルキウエイ

おおミルキウエイ

このまま夜よ止まれ〉(〜内くりかえし)

と、雨……コーラスを歌っていたらしい人影が、アリの子を散らすように去っていく。

——雨だ、雨だ。

——雨だよオ。……

不思議そうに空を見るオリエ。

と、コーモリ傘がパツと開いて、オリエと空の間に割って入る。

オリエ あら？……えっと、マメダ先生。

見ると、元氣そうに太った丸顔に大きな眼鏡をかけた、若い男が傘を持って立っている。マメダホシオ。この高校の教師らしい。

マメダ 名前、おぼえてくれたんですか、おととい転任してきたばかりなのに。オリエさん。

オリエ あら、先生だって、私の名前。……

マメダ (照れて) お互い、覚えやすい名前なんですよ。ね。

オリエ ええ。

と、両手を傘の外に出して雨を受けてみる。

オリエ いやな雨。

マメダ 星が泣いてるんでしょうか。(ポケットから小さな望遠鏡を出して空を覗く)

オリエ すいません。下校時間はとくに過ぎているのに、まだ校庭に残ったりして。

マメダ 下校時間？……もう真夜中ですよ。オリエさん、あなたですか、オルガンをこんなところに持ち出したのは。

オリエ ええ。弾いてみようかなと思って。

マメダ 音楽室で弾けばいいのに。

オリエ でも楽譜が。

マメダ 楽譜？

オリエ ほら、空にいっぱい。星のつぶつぶが、まるでドレミファソラシド。

マメダ へーえ。

オリエ 五線紙が地平線から天頂に。

マメダ 天の川ですね。

オリエ 私、あの楽譜を弾いてみようと思って。

マメダ それでこんなところにオルガンを。

オリエ はい。

マメダ 一人で？

オリエ はい。

マメダ 力持ちなんですね。

オリエ 母に似たんですきつと。母は百姓でしたから。

マメダ お父さんは？

オリエ 税務署の職員です。

マメダ それじゃあ僕の親父と一緒に。

オリエ うわっホントですかあ。

マメダ ええ、ですから、子供の頃、お小遣いもらうと、ちゃんと一割税金引かれてんですよ。

オリエ 先生。
マメダ はい。

オリエ 雨、やんだみたいです。

マメダ 狐の嫁入り、にわか雨だったんですね。(傘をたたむ)

オリエ そうですね。

マメダ 良かったですよ。にわか雨で。これがニカワ雨なら、いまごろそこいらじゅうが、くつついてベタベタですよ。

オリエ へ？

マメダ ニカワ……知りませんか。膠ですよ。

オリエ ああ、くつつけるニカワですね。

マメダ ええ、そうです。

オリエ たとえば、(と、手のひらをマメダの胸にペタン) こうやってくつついやうのかしら、

マメダ え、ええ。

オリエ (今度は顔に胸をうずめて) くおういうふうにもれすか。フガフガ。

マメダ たぶんね。(と、少々とりみだしながら、そこはやはり教師としての理性を見せ
て) あ、あのオリエさん。

オリエ ふあい。

マメダ ニカワのまねはいいですから、ほらオルガン、オルガンをかたづけなくちゃ。

オリエ (離れる)

マメダ (ハンカチで汗をぬぐう)

オリエ 先生。(と、オルガンを持ち上げる)

マメダ ふあい。いや、はい。え!(驚く)

オリエ かたづけの前には一曲だけ弾いてもいいですか。

マメダ じゃあ、一曲だけね。すごい力持ちだなあ。

オルガンを地上に降ろして、それを弾くオリエ。

オリエ 先生、歌ってみてください。

マメダ え?……だって、その歌、知らないですよ。

オリエ テキトウに。適当に星を見ながら弾いているんです。だから、エエカゲンに歌って下さい。

マメダ エエカゲンに？

オリエ はい。

マメダ そうね。それじゃあ。

と、歌ってみる。

カヤナギのかわを せんにて飲めば

あくら不思議 熱が下がる

それはアセチルサリチル酸

アスピリンだからだよ

でも恋のお熱にや

そいつは効かぬ

ラブった頭は そいつじゃさめぬ

ああ、おいらはあの娘にラブってる

誰か さまして おいらのお熱

オリエ さすがに化学の先生ですね。それ、アスピリンの歌ですか。
マメダ おーいえい。恋の解熱薬っていうタイトルにしましょうか。

オルガンを弾きつづけるオリエ。その音楽に合わせて、歌うように。

マメダ ええ、そもそもアスピリンの合成は、フェノールを水酸化ナトリウム水溶液にと
かしまして、フェノールナトリウムつてのを作るところから始まります。フェノール、
日本語で云うと石炭酸。化学式が C_6H_5OH 。これがフェノールナトリウムとなりま
して、今度はこいつを圧力がまの中で二酸化炭素といっしょにしまして、フェニル炭
酸ナトリウムとし、さらにサリチル酸ナトリウムへと変化させるわけであります。や
やこしいですがここで終わりじゃありません。こいつをさらに塩酸で分解し、サリチ
ル酸だけを取り出して、それをサク酸と化合して、めでたくアセチルサリチル酸、ア
スピリンができるわけであります。もちろん触媒となす薬品もいろいろと要るわけし
てえーと、

オリエ (突然オルガンをやめる)

マメダ あれ、どうしたんです。ちよっと難しかったかな。

オリエ (空を指さし) 月が。……

マメダ ああ、月ですわねえ、

オリエ 赤い月が……赤くて大きな。……

マメダ うん。大気中のガスの具合で、月の色が変わって見えるんですよ。

オリエ 先生、楽譜が消えちゃいました。

マメダ え？

オリエ 月の光で、星が見えないんです。

マメダ 本当だ。

血のような月光が二人に降りそそぐ。

オリエ うわっ。……眩しい。……眩しくて、星の楽譜が読めやしない！

月光の中に二人溶けていく。まるで、化学合成されるかのように。……

NHKの「歴史への正体」にでも出てきそうなレポーターふうの人物一人、マイク片手

に現われる。彼はこれからこの物語のナレーターをつとめることになる。

レポーター 赤い月の光。……：都会の夏の夜などにのぼる、あの大きな赤い月です。メタンガスや二酸化炭素などなどの空気中の不純な気体のために、月光のスペクトルが変化をきたし、月は水中に浮かんだ血だまりのように、どす赤く見えます。

先程までの美しい星空とは、うって変わって、この妖気さえ漂ってきそうな空の色です。

あの美しい星空と少女の歌を聞きながら、私たちはきっとステキでロマンチックな物語が始まるだろうと期待いたしました。ところがそんな思いを洗い流すかのように、不吉なにわか雨。そしてこの凶凶しい赤い月です。

さて、どうやらこの展開は一つの暗示であるらしいのです。この物語の全体のデフォルメであるらしいのです。私は、よろしければ皆様方を奇妙な旅にお連れしたいと思えます。それは、ここに登場した高校教師のマメダホシオと、女生徒のオリエさんが経験した不思議な、そして恐ろしい旅であります。

事件は何の変哲もない、ごくありふれた小さな町の高校から始まりました。旧暦の七月七日、七夕の日。この日こそ、マメダホシオとオリエの二人にとって、忘れられない日となるのでした。いつ、……：いつ、……：いつでも。……：……

暗転

景一

体育の時間。チャイムが鳴る。体育教師の木村が笛を吹く。

木村 今日はここまで。それじゃ体操をして終わりにします。

ラジオ体操。女生徒たちが散らばる。

木村 いいかげんにやっちゃいかんよ。しっかりやんなさいよ。

などと云いつつ、一番いいかげんなのは木村の体操である。短足が不気味に動く。

木村 しっかり体操すれば、スッキリと美しいプロポーションになれます。しっかりやんなさいよ。

ラジオ体操が終わる。

木村 それじゃあ解散！

女生徒たち去っていく。

木村 あ、オリエ君、ちよつと。

オリエ はい。

木村 ちよつと来て。……

オリエ はい。

木村 (辺りを気にして、小声で) オリエ君、僕のお手紙、読んでくれましたか？

オリエ 手紙？

木村 君のロッカーに入れといたんだけど

オリエ 手紙って、あの、あれですか。

木村 そう。

オリエ 紙に字がかいてあるヤツ？

木村 あたりまえですよ。誰が黒板にチョークで書いて封筒に入れたりするもんですか。

オリエ (ポケットから出す) これですか。スポーツ新聞の余白にマジックで愛して
ますって書いてある、この、

木村 シッ……大きな声で云わないでくださいよ。聞かれたらどうするんですか。

オリエ すいません。

木村 で、読んでくれたんですか。

オリエ ——オリエさん、愛してます。体育用具室へ行きましょう。——これ、先生
が私にくださったんですかあ。

木村 そうなんです。

オリエ そうだったんですか。

木村 で、どうなんです。

オリエ どうって？

木村 返事ですよ、返事。

オリエ ええ……あの、どうして、体育用具室なんかに行くんですか。

木村 またこの、このこのお、カマトトぶっちゃってまあ、決まってるじゃないですか、
あそこにはマットもあるし、

オリエ 飛びバコもあるし。

木村 飛びバコ？……んー。まあね。あれも使いようだけど。

オリエ 平均台もあるし。

木村 うん、平均台ね、あれもまあ使いようだな。

オリエ バレーボールとかバスケットボールとか、

木村 いや、そんなものはいいんですよ。

オリエ 使いようで、何とか。

木村 使いようだったって、あんなもん、ねじこむわけにいかないし。……

オリエ ソフトボールのベースやグローブなんかもあるし、それからライン引きもありま
すよ。

木村 ライン引きねえ。あれねえ。んー。

オリエ 運動会で使う玉入れのカゴとか、綱引きの綱とか。

木村 玉入れのカゴねえ。んー、綱ねえ。んー、この際、あのカゴかぶってやってみるか。

綱はそうだな……それにしても問題はライン引きだな。

オリエ 考えといて下さい。

木村 分かりました。ようするに使いようなんです。分かりました。考えときましよう。

考えながら、木村去る。オリエも行こうとする。と、呼び止める別の男の声。

——オリエ君

オリエ え？

えらくインテリ風の教師がでてくる。

オリエ 森センセエ。

森 オリエ君、こっち、こっち。こっちで静かに青年期の諸問題について語ろう。オリエ君、ルソーは「エミール」の中で何と云ってるか知ってるかい。

オリエ エミールって、少女雑誌の名前ですか。

森 違うちがう。

オリエ じゃあ、乳酸飲料ですか。

森 このあいだの授業でやったじゃないか。「エミール」はルソーの教育論だよ。その中で、彼はこう云っている。我々はいわば二度生まれる。一度は人間として生まれ、もう一度は男、もしくは女として生まれるのである。とね。オリエ君、君は女として生まれたかい？……分かるかい、青年期とは子供から大人になる過渡期である。年齢にすれば十二、三歳から、二十五歳くらいまでだ。

オリエ 先生は？

森 私は二十八歳だから、数字の上ではもう青年期ではないかも知れない。けれど、心は青年だ。青年として君たちの先輩だ。分かるかね。ルソーはまたこうも云った。青年期、この嵐のような革命は生まれ出んとする情欲のささやきによって前触れされる。重々しい醗酵期が、危険の接近を予告する。気質の変化、激情の頻発、精神の不断の興奮などが、こどもをほとんど訓練できなくする。前には彼を柔順にさせたことがもはや彼の耳に入らなくなる。まるで熱病をわずらっているライオンのようになる。ウガーツ、ウガーツ……ライオンだ。ライオンなんだ。オリエ君、君はライオンだ。熱病の牝ライオンだ。そして僕は牡のライオンだ。もはや二人の関係をアウフヘーベンするのはカピュレイションしかない。カピュレイション、そう交尾だ、交接だ。しかしまてオリエ君、ブルマーを脱ぐのは待ちたまえ。人間は肉体だけで生きているのではない。分かる。分かるんだ。君のその身体的成熟と精神的成熟のアンバランス。先生には分かる。一時的生理的欲求が先生にはよく分かる。待ちたまえオリエ君、ここでショートパンツを膝まで下ろすな。さあ、行こう、宿直室へ。そこで心ゆくまで汗をかいて、青年期のゴニョゴニョについてぶちかまそう。

熱弁する森センセ。と、女生徒が一人来て

女生徒 オリエさん、校長センセが呼んでたわよ。校長室へ来るようになって。

オリエ あら、何かしら、早いとこ着がえなくっちゃ。
女生徒 あ、着がえなくていいんだって。そのままの格好で来なさいって。
オリエ へーえ、……ありがと。

女生徒去る。オリエも去る。
森、それを見送って……

森 では次に、行動の機制、メカニズムつまり欲求不満の解決の仕方について考えてみよう。心理学でいうところの、抑圧と退行と昇華である。抑圧とは、不安を生じる動機その対象、不快な考え、これら一切を意識からしめだすことである。

体育の木村がライン引きを押しながら現われる。

木村 うーん。この際場所を変えてみつか。

森 退行とは子供っぽい行動や態度をとって責任のがれをすることである。昇華とは代償行為に価値的要素が加わることである。すなわち、宿直室がそれである。

木村 そうだ、宿直室があった。

森 宿直室においてこそ、二人の愛は昇華し、アウフヘーベンするのである。

木村 森センセイ。

森 たとえばギリシャのデモクリトスは

木村 先生。

森 デモクリトスは、それでもクリトリスではなかった。

木村 先生。

森 ……おや、これは木村センセ。

木村 御一人で、何をなさって? ……るんですか。

森 はあ、エミールからデモクリトスに至る教育の論理を宿直室で展開してみようかと思
いまして。

木村 熱心ですなあ。

森 いやあ、教師たるもの、これぐらいでなけりや。

木村 同感です。

森 ありがとうございます。

木村 で、やっぱり、体育用具室より宿直室の方が、ようござんすねえ。

森 ええ。図書室とか屋上と違って、手もあるんすがねえ。

ふんふん……等と語りあいつつ去る。

暗転

景二

校長室。

らしい机と応接セット。

窓からグラウンドを望む。というポーズの校長センセ。

校長 素晴らしい。……若いということは本当にステキだ。若さとは永遠の美だ。若い人たちは美しい。何のクツタクもなく、ハツラツとして、校庭にはずむ若い命。……若いって素晴らしい。若い娘はほんとにいい。ピチピチと太股を躍動させて右に左に白いボールを追うあの、牝鹿のようなしなやかな様……良かった。……ほつんとーに良かった。小さな地方の町の女子高とはいえ、校長になれて、ほつんとおーに良かった。女子高の校チョーになれて、ああ私の人生に悔いはない。ほんととおおに。

と、窓ガラスを破ってソフトボールが飛んできて校長センセの顔面を直撃する。

校長 グエツ。……痛てて……くそお……ううむ。ガマンだ。ここでガマンしないと、校長としての威厳にかかわる。ガマンだ。ガマンだ。ガマンガマンガマンガマンガマンガ……マンガだ。

見ると、片方の眼が青くアザになっている。

校長 マンガだまるで。プンプン。プンプン。

と、ノックの音。

校長 はい。誰ですか。

——オリエです。

校長 ああ、オリエ君か。入りたまえ。

オリエ、入って来る。

校長、ペーパーナイフで封筒など開けながら、

校長 まあ、座りたまえ。先生は今、海外の姉妹校から送られてきた、友情のお手紙に眼を通していたところです。

オリエ (座る)

校長 これからの高校は国際交流をはかっていかねばなりませんからね。そうでしょ、え？オリエ ええ、でも私は海外でなくて、近所の別の高校と交流したいんですけど。

校長 バカ云っちゃいけない。他(よそ)の不良どもと、交流だなんて、ふんなバカな君。

交流の交って字は、性交の交ですよ。そんな不純なことイケマセン。

オリエ 先生、御用は何でしょう。

校長 うむ。用事というのは他でもない。(と、オリエのとなりに座る)君の人生についてなんだがね。(と太股をなでる)

オリエ (後ぞいて) 私の人生ですか？

校長 そうです。君、年齢は？

オリエ 十六ですけど。

校長 うむ。そうでしょう。十六、それはもはや十三、四の子供ではなくて立派な大人であるということです。民法第七百三十一条で、女性は十六歳になれば婚姻することができる定められております。知ってますね。

オリエ はい。

校長 結婚は人生の一大事。人生はこの結婚によって九割がた決定されるわけでありませう。

オリエ ここはシンチョーに相手を選ばねばなりません。分かりますね。

オリエ はい。

校長 十六というのは大人のようにまだまだ子供です。

オリエ あら、さつきは立派な大人だとおっしゃったのに。

校長 いえいえ、私は、人を見る眼のことを云っておるのです。十六のあなたには、不良少年も好青年も見分けがつかないのです。ここは目先のことにとらわれず、深い理性でもって、結婚を考えるべきです。そこで、地位もあり、財形貯蓄もあり、思慮分別もしつかりした、安心できる男性を夫とすべきなのです。オリエさん、結婚しましなう。

オリエ え？

校長 結婚です。ふおりえしやん、わ、私と、結婚しよう。(抱きつく)

オリエ キヤッ！

校長 (押し倒して) 金もある地位もある。精力だってまだまだ若いもんにや負けやせん。ど、どうだ。

オリエ 夢も希望もないわ。やめて！

校長 そのかわり、ねっちこいテクニクがあるぞ。

オリエ いやん。先生、入れ歯が臭いわ。

校長 これ、大人しくしろ。け、結婚してやるといふのに。け、けっ、結合だ。まず結合だ。

と、あのレポーターが出て、

レポーター まったく、どういふことなんでしょうか。オリエという少女は、持って生まれた美しさのために、あたかもジュスチヌのごとき運命を背負わなければならないのです。いいえみなさん、不幸はこればかりではありません。ほんとうの不幸はこの直後におこったのです。

ギエーツという叫びを發して、校長が、オリエから離れる。見ると、その胸にあるのペーパーナイフが、突き刺さっている。

レポーター ああ、まったく不幸としか云いようがありません。少女は無我夢中の抵抗のうち、あのペーパーナイフを校長の胸に突きたててしまったのです。ブスリと。

オリエ キャーツ。

床にのたうつ校長センチ。慄然とし、やがて呆然とそれを見つめる運 命の美
少女。

と、ドアが開いてマメダが入って来る。

マメダ 失礼します。転任届けの、(と、先客があるので) あ、どうも。(と去ろうとするが) え？

状況に気づいて、驚くマメダ。

マメダ こ、こ、これはいったい。オ、オリエ君。

オリエ (マメダにしがみつく)

マメダ オリエ君！

オリエ オリエって呼んで。

マメダ オ、オリエ

オリエ 逃げて先生！私と一緒に逃げて下さい。

マメダ 何があつたのか

聞いてみなくても

僕には分かる

床に血だまり

胸にペーパーナイフ

そして震えおののく

美少女ひとり

オリエ 何があつたのか

聞かずに逃げて

私と一緒に

床に血だまり

胸にペーパーナイフ

そして震えおののく

私がひとり

レポーター とにもかくにも歌など歌ってる場合ではないようです。

校長が非常ベルを押す。怯えるオリエ。

マメダ し、しっかりするんだ。理由は後から聞こう。この場は、さ、早く。
オリエ はい。

マメダとオリエ行こうとする。が、オリエはたと立ち止まって。

オリエ 先生。

マメダ 何だ。

オリエ 私、先生を愛してます。

マメダ (オリエの瞳を見つめる)

オリエ (見つめかえず)

マメダ よし、僕は君を信じよう。

音楽、二人歌いそうに構えるが。

マメダ いや、歌は後だ。オリエ君。

オリエ はい。

二人、足早やに去る。

レポーター やれやれ、とにもかくにも、こうして転任してきたばかりの化学の教師マメダホシオと、美しき女生徒オリエとの逃避行は始まったのです。ところでそれはまさに命をかけた苦難の道となるのであります。果たしてそれが今の二人に予想できたでしょうか。……いいえ。恋は盲目ですが、恋の道行きはもつと盲目です。彼等はまさに暗黒の森に放り出されたのでした。……

音楽

暗転

景三

校長室。木村と森が並んで立っている。背を見せて、校長が、天井を
で立っている。 あおい

校長 木村先生。

木村 はい。

校長 森先生。

森 はい。

校長 困ったことになりました。

木村・森 はい。

校長 いやしくも、高校教師であるマメダ君が、女生徒と駆けおちするとは。私は胸が痛む
む思いです。

と、ふり向くと、胸にはペーパーナイフが突き立ったままになっている。

森 おさつし申し上げます。

木村 さぞや、胸もお痛みのことでしょう。

校長 痛い。ほんとうに胸が痛みます。

木村 こうするともつと痛むのでは。(と、カナヅチを出して、ナイフを打つ) コンコン。

校長 イテッ。こら君、冗談はやめんか。

森 ところで校長、私どもに用事とは？

校長 うむ。それは他でもありません。マメダ君とオリエ君をここに連れもどす仕事、それを君たちにやってもらいたい。

森 やはりそうでしたか。

校長 事は急をようします。早急にカタをつけないと、他の生徒たちが騒ぎ始めます。木村君、

木村 はい。

校長 君は本校の体育教師です。

木村 はい。

校長 つまり、健全な肉体の代表であります。

木村 はい。

校長 森センセイ。

森 はい。

校長 あなたは本校の倫理社会の教師です。

森 はい。

校長 つまり健全な精神の代表であります。

森 プラトンの四元徳とは、知恵、正義、勇氣、——

校長 分かった分かった。よろしい。

森 はい。健全な精神であります。

校長 昔から、健全な肉体には、

木村 子種がやどる。……じゃなかったですね。

校長 健全な肉体には精神がやどると申します。肉体と精神、これはもう鬼に金棒のようなものです。君たちの健全なる肉体と精神をもって、不良教師のマメダホシオを連れもどし、一刻も早くオリエ君を健全な道にひきもどすよう努力して下さい。

木村・森 分かりました。

校長 少なくとも……

森 少なくとも？

校長 女生徒の方だけは必ず、連れて帰るように。

木村 ということは校長、マメダの方はどうカタを付けてもいいと……。

校長 うほん。それは君たちの好きなようにしてよろしい。

森・木村 マメダの野郎、

校長 それでは、これは少ないが、旅費にでもして下さい。(封筒を渡す)

木村 はっ。ありがとうございます。

森 では、行ってまいります。

校長 うむ、成功をいのる。

森と木村、封筒の中身を見る。

森 幾ら？

木村 五百円玉が一個。……

暗転

景四

暗い森の中。今にも泣き出しそうな空。

夜、ビロードの帳のような。……

マメダとオリエが来る。

見知らぬ鳥が鳴いて飛ぶ。

オリエ 先生、こわい。

マメダ 気持ちをすっかり持つんだ。ほら、先生だって恐くって震えてる。同じだよ。

オリエ 夜になったのね。

マメダ 太陽が西の空に沈んだだけさ。もっと科学的に云えば、地球が自転して影の部分と光の部分が入れかわっただけだ。ガリレオは正しい。コペルニクスも然りだ。

オリエ でも、こわいわ。まるで押入れの戸が、ひとりでにスーッと開いて、闇がすべりこんできたみたい。ねえ先生、どうして夜ってこんなに恐ろしいのかしら。

マメダ そうだねえ。先生にもよく分からない。今度フラスコの中に夜を入れて、よく研究してみることにする。

オリエ 先生、ここどこなの？

マメダ たぶん、

オリエ たぶん？

マメダ 道に迷ったらしい。

オリエ じゃあ、ここは。

マメダ (磁石を出して) カンパスがくるくる回ってる。いったいどちらが西で東やら、オリエ 私、泣きそうよ。まるで今夜の空のよう。

と、シヨボシヨボと雨が降ってくる。

マメダ 雨だ。

オリエ どうしましょう。

二人で一枚の新聞紙をかぶる。

マメダ (ポケットから紙きれを出して) ほら、転校許可証と転任証明だ。

オリエ まあ。

マメダ どさくさに事務局から盗んできたんだ。これさえあれば、何処の学校にだつてもぐりこめる。

オリエ 理想の学校は無いのかしら、愛と自由とそれから、うんとステキな友だちと。

マメダ 道に迷わなければ、そこに着いてたはずなんだ。

オリエ え？

マメダ 話に聞いたただけだけど、聖者が始めた学校で、聖（サンタ）ルナキスト学園というのがあるという。深い森の奥、俗界を離れ至福の教えを説くという。

オリエ 聖ルナキスト学園？

マメダ そう、理想の学園だ。

オリエ ステキね。

マメダ そこには体育用具室も宿直室も無いという。

オリエ そこに行ければ最高ね。でも、こんな真夜中に、転校なんてさせてくれるかしら。

マメダ 大丈夫だよ、きつと。……おや、あんなところに光が。

オリエ え？

マメダ ほら。

オリエ 星かしら。

マメダ ひよつとすると、聖ルナキスト学園の灯かも知れない。

オリエ だといいわね。

マメダ きつとそうだ。

オリエ きつとそうね。

マメダ まるで二人の道しるべのように灯っている。

オリエ きつと理想の学園の灯だわ。

二人歌う。

オリエ 光を見つけた。

暗い夜 森の道に迷いながら

まるで 救いの星のような

光を見つけた

マメダ 赤く燃える それは

二人の愛の道しるべ

闇を切り裂く

神のソード

オリエ・マメダ 光を見つけた。

暗い夜 森の道に迷いながら

まるで 救いの星のような

光を見つけた

オリエ 行こうあの光のところへ

（コーラス） それは聖（サンタ）ルナキストの灯

マメダ η行こうあの光のところへ
(コーラス) それは聖ルナキストの灯

と、暗い闇にボウツと白衣の女性が浮かび上がり、紅い唇をゆがめて歌う。オリ
エとマメダはそれに気がつかない。
白衣の女性、聖ルナキスト学園の教師で、桐島と云う。

桐島 η夜は流れる

月と影とを友として

蜜のような無言(しじま)を

薔薇の鞭で打てば

処女(オトメ)のリボン解ける

オリエ η行こうあの光のところへ

桐島 ηそれは聖ルナキストの灯

オリエ・マメダ η行こうあの光のところへ

(コーラス) それは聖ルナキストの灯

桐島 (セリフ) 月既 不 解 飲 影 徒 随 我 身

我歌 月徘徊 我舞 影零乱……李白

桐島は消える。

マメダとオリエ行こうとすると、黒い帽子(ソフト)に黒いレインコートの男が
二人、通せんぼをする。

マメダ 何だ君たちは!

男1 通せんぼ通せんぼ

男2 恋の道行き通せんぼ

男1 ここから先はままならぬ。

男2 恋の道行きままならぬ——

男1 マメダ先生、この先は学区外です。我が校のエリアから離れます。他校の学区内(テ
リトリー)へ逃げようなんて、そうは問屋のシラバカマ、

男2 それを云うなら、問屋がおろさないでしょ。

男1 シラバカマって言いませんか?

男2 あれは紺屋ですよ。

マメダ その阿呆な会話……あなた方は、木村センセに森センセ。

木村 チェッ、見ぬかれたか。

森 先生がバカなことを云うからですよ。

木村 ヘッ。どうせ私はバアカですよ。何しろ体育大学しか出てないすからね。へん。

森 まあ、まあ。

マメダ この間に逃げよう。

と、同様にレインコートを着た連中がズラリと出て、行く手を遮る。

マメダ うわっ、また出た。

森 諸君、二人をつかまえる。

オリエ 先生！

マメダ オリエ君、ここは僕にまかせて、あの光のどこまで逃げるんだ。

オリエ でも先生！

マメダ 心配するな、必ず僕も行く。さあ早く！（オリエを突き放す）

木村 逃がすな！

と、レインコートの集団を今度はマメダが通せんぼする。

立ち回りがある。

森が銃をだす。

マメダ あ、それは。

森 見えるか、これはペストロだぞ。本モノのペストロだぞ。撃てば飛ぶしあたれば死ぬぞ。

マメダ 教育者ともあろう者が、何という暴力を！

森 うるさい！それはこっちの云いたい台詞だ。教育者ともあろう者が、転任したばかりで女生徒と駆けおちしやがって。

木村 そうだ。おまえなんか死ぬ。俺たちは、たった五百円しか旅費をもらってないんだ。

でもなあ、おまえを殺そうが生かそうが俺たちの好きなようにしていいんだぞ。

森 ちくしょう、マメダ。おまえ、オリエ君といいことしたんだろ。くそ。

マメダ 何を云うか。僕たちはプラトニックだ。

木村 プラットホームでやったのか。あんな人目につくところで、どうやってやった。

森 この野郎、サルトルとボーボワール気取りでやったのか。実存的にやったのか。それなら、こっちはヤスパースだ。どうだ限界状況だぞ！

木村 ヤスパースってのは、アメリカ大リーグの野球チームですかね？

森 （無視して）とにかく死んでもらうぞ。

マメダ 無茶苦茶だな君たちは。

森、発砲する。数発の銃声が響く。

——闇。……

暗転

景五

祈りのような、はたまた呪文のような歌が聞こえ、影絵の人々がそれに合わせて踊っている。

カベントラ ベントラ
お空にベントラ
ベントラ ベントラ
お山にベントラ
ベントラ ベントラ
畑にベントラ
ベントラ ベントラ
乗りたいベントラ
会いたいベントラ
出てこいベントラ
ベントラ ベントラ
飛んでこい

マメダが歩いてくる。影絵の人々をかき分けながら……きっとオリエを捜しているのだ。と、機織りが一台現われて、女がそこに座っているのが見える。オリエだ。

キトンキトンと機織りの音が聞こえ、その調子を取るようにして、オリエが歌う。

オリエ
カはあたあ おおるうは

みめうるわしゆう

むうらの おなごしのわざよ

おりたる はたを

みに つけもせで

キトン キトン

マメダ (オリエに気がつき) オリエ君、そんなところで何をしているんだ。

オリエ 待っているのです。こうやって機を織りながら。

マメダ 僕なら、こうやってやって来たよ。

オリエ じゃあ、こちらにお来しになって下さいな。

マメダ行こうとする。と河のゴオゴオと流れる音。マメダ立ちすくむ。

オリエ どうなすったの。

マメダ 河です。眼の前に河が流れているんです。

オリエ ええ、河があるんです。

マメダ どうすればいいんだ。僕は泳げない。

オリエ ええ。ですから私たち会えません。

マメダ バカな。

オリエ 年に一度、その河に橋がかかるそうです。

マメダ 年に一度？

オリエ ええ、七夕の夜。

マメダ それは星の伝説だ。

オリエ でも渡れないんです。赤い月が出て星がみんな消えてしまうから。

マメダ 何を云ってるんだ。

オリエ 星が消えると楽譜がなくなって、私オルガンが弾けなくなるんです。

オリエが機織りの向こうに座る。どうやらこの機織りはオルガンの変形したものであるらしい。

オリエ そうすると、星の伝説もおしまいになるんです。

オルガンを弾き出す。

オリエ 私、オルガンを弾いていた。でも月が、赤い大きな月が登ってくる。私のオルガンが終わると、きつと私たちの夢も終わってしまう。だから私、オルガンを弾いていた。

マメダ オリエ君。

オリエ ほら赤い月が。

辺りが赤く染まってくる。

マメダ こ、これは。

オリエ 月の光は透明で冷たい静かな光のはずなのに、ここに登る月は、赤くてどんよりとしていて、何か大きな幻みたい。私たち、こんな夢に生きてるんですか？センセ：……センセ……

マメダ 違う、ちがうぞオリエ君。

オリエ 私たち、こんな赤い月の伝説に生きてるんですか。センセ、センセ……

マメダ いいえけして。

オリエ でも、これでけっこう私、気持んよか。(眠そうにうっ伏す)

マメダ 眠っちゃいけないオリエ君。これはね、オリエ君、月と地球の間にガスが漂よつていて……オリエ君、オリエ君。

またあの呪文が聞こえてきて、影絵の人々が動き出す。

マメダ オリエ、オリエ君！

影絵の人々、マメダのまわりを回り出す。

赤くて大きな月が登る。

——幕

第二幕

景一

「笹の葉さらさら、のきばにゆれる」と、遠くでオルガンが歌っている。ベッドがひとつ。誰かが眠っている。

と、オウムが人のまねをして出しているような声が、聞こえてくる。

——センセ、センセ……センセ……センセ……タスケテタスケテタスケテ……
……センセ、センセ……ワタシヨワタシヨ……センセ、センセ、タスケテ……

ベッドの男がガバツとはね起きる。マメダだ。頭に包帯をして、パジャマを着ている。

マメダ オリエ君！

立ち上がろうとするが、身体の痛みにも、またベッドに座りこむ。

ドアが開いて、白衣の男が入ってくる。

白衣 お気がつかれましたか。

マメダ ……ここは何処でしょうか。

白衣 うむ。いい質問です。それで私がここは、とある場所です。と答えるとしませす。そうするとアナタは、とある場所、それは何処です。とまた問いかえすでしょう。そして、私がほらつと、ドアを指さし、戸があるから、とある場所ですと申しあげたならば、アナタは少々ズッコケつつも、ほんとに何処なんですと、シツツコク質問されるでしょう。ですから、そのような取るに足らぬギャグは一切省略して、私、お答えいたしました。ここは、

マメダ 何処なんです。

白衣 とある場所です。

マメダ (少々ズッコケる)

白衣 ガチョーン。

マメダ ここは病院ですか。

白衣 いいえ。

マメダ そうだ、思い出した。僕は夢中で何処かに飛びおりたんだ。銃を突きつけられて、それで、何だか分からないけど、何処かに飛びおりたんだ。

白衣 ここは実は地底の王国なのです。

マメダ 地底の王国？

白衣 アナタは、偶然にも、地底王国の入口に飛びこまれたのです。

マメダ 何だって？……（と、窓の外を見て）でも太陽が……

白衣 あれは人工太陽です。核エネルギーを電気エネルギーに変えて、ああして輝いているのです。何を隠そうここは地下一万メートルの空洞につくられた地底王国なのです。その広さたるや東西に一千六百キロ、南北に二千二百キロ、人工の太陽をあおぎ空気を合成し、人々は一年中温和で清らかな環境のもと、平和で愛ある生活を営んでいます。

マメダ こりや大変なところへ来ちゃったな。（空を見て）じゃあ、あの青い空は、

白衣 コンクリです。

マメダ へ？

白衣 コンクリ塗って、その上にペンキで青色に……

マメダ ペンキ塗ったんですか。

白衣 ええ。ハシゴかけて、ペタペタと。

マメダ ペタペタとねえ。

白衣 そいでもって、ヒモで太陽ぶらさげて、

マメダ へ？

白衣 あの太陽ね、割れるとハトが出るの。

マメダ まるでクス玉だな。

白衣 割ってみましょうか。

マメダ いえ、結構です。ところで、僕は大切な用事があるんです。助けていただいて、恐縮ですが、何とか地上へ戻れませんか。

白衣 地上は亡びました。

マメダ へ？

白衣 昨日、核戦争があつて、地上はバアになっちゃったんです。

マメダ バアですか。

白衣 バアです。あなたがアジャーで二つ合わせてアジャパーです。

マメダ （頭をひねる）

白衣 〃私がアジャなら

あなたはパーよ。

二人一緒にアジャパーよ。

マメダ （首をひねる）

白衣 うどん食べますか。

マメダ うどん？

白衣 ええ、給食のおかず、今日はうどんなんです。

マメダ 地底王国は給食なんですか。

白衣 ええ。

マメダ レムリアとかムーの子孫もやっぱ、うどん食べるんですか。

白衣 ええ、

マメダ 七味入れて？

白衣 ええ、ネギぎざざで。トントントン。

マメダ ネギ嫌いなんだけど。

白衣 レムリア、ネギみんな好き。ネギ、嫌い良くないことある。

マメダ インデアン、ネギ、がまんするよろし。

白衣 じゃあ、持ってきます。

白衣、去る。

マメダ ここが地底の王国でないということは、まず間違いないとして、いったい何処なんだろう。

と、ベッドにぶらさがっているノートが目に入る。手にとって表紙を読む。

マメダ ……保健室ベッド利用記録帳……聖ルナキスト学園……聖ルナキスト！そうかここは聖ルナキスト学園だったのか。僕は助かったんだ。

と、再びオウムの声。

——センセ、センセ、タスケテケケケ、センセ、センセ、タスケテ、センセ

マメダ オリエ君！そうだ、こうしちやいられない。オリエ君を捜さなくっちゃ。えーと、ズボンズボン？……

ズボンをさがす。ズボンがあった。

マメダ (パジャマを脱いでパンツ一つになる)

と、またオウムの声

——センセ、センセ……

マメダ あの声は何だろう。さっきから助けを求めるあの声は……

と、ドアが開く。マメダ、パンツ一つなのであわてて、ベッドの影に隠れる。

女生徒が給食を持って入ってくる。

女生徒 給食をお持ちしました。あれ？……居らっしゃらない。……(キョロキョロ) ここ、置いときますよ。(床に置く) あーあ、次の授業、さぼっちゃやおうかなあ。(と、ベッドに転がる) あふーん。うふーん。いやんやーん。やだー。うっそおー。(などと一人でふざけている) 待って、あせらないで……いや、もう待てない。僕は君が好きなんだ。駄目、ダメよ。いいじゃないか、好き合ってるんだから。ああ、いや。(などと一人で芝居している) ああ、だめ、スカート脱がしちゃ嫌い(と云いつつスカートを脱いでしまう。)

マメダ、そおっと出て行こうとするが、女生徒と眼があう。

女生徒 キヤッ。

マメダ キヤッ。

と、ドアがノックされて開く。桐島が入ってくる。マメダあわてて女生徒にシートをかぶせる。

桐島 失礼します。(マメダを見て、啞然とする)

マメダ どうも、お世話になりましたようで。

桐島 もう大丈夫のようですね。

マメダ はい。

桐島 あの、ズボンを……

マメダ あ、あ、ども、どうも失礼を。(とズボンをはく)

桐島 初めまして。私、この学園の副園長で桐島と申します。

マメダ あの、ここは？

桐島 ああ、そうでしたね。はい。ここは聖ルナキスト学園です。学校なんですよここ。

マメダ はい。

桐島 驚きましたですよ。森ん中にお倒れになってたんですからね。

マメダ はあ。

桐島 お眠りになってる間に身許を調べさせていただきました。

マメダ ドキ。

桐島 と云つてもポケットから、これ(と身分証明と転任証明のカードを見せて)が出てまいりましたから、転任を希望なさっている化学の先生だっことはすぐに分かりましたけどね。

カードを返す。

マメダ ええ、その通りです。

桐島 これも何かの御縁ですわね。どうですいつそのこと、ここへ転任なされては。当校

は丁度、化学の先生がいらつしやらなくて。

マメダ それはもう願ったりかなったりです。

桐島 でもどうされたんですか。あんな所にお倒れになっていて。

マメダ え、いや、はい。そのお。道に迷ったところを、暴漢に襲われました。

桐島 まあ、ポーカンに。……：：：：：そういえば昨夜。銃声を聞いた者もおります。それはそ

れはヒデエめに会われましたね。(と、スカートをひろいあげる)

マメダ ええ。まったくです。

桐島 (ベッドをにらんで)

マメダ あ、それ、

桐島 (マメダを見る)……：：：：：誰かいるんですか。

ママダ それが、さつき地底王国の何とかかんとかって人がうどんをここに持つてくるように手配して下さいましてそれで、女の子がうどんを、それが急にスカートを脱ぎまして。

桐島 頭のどの辺かをお打ちになったんですか。

ママダ いえ、気は確かです。

桐島 誰か寝てるんですね。

ママダ ええ。

桐島 スカート脱いで？

ママダ ええ、でも、パンツははいてましたから。それにここは保健室ですし、ベッドがあるんですし、気分が悪くなったんじゃないでしょうか。

桐島 なる程。(うどんを見る) ここへ食事を持ってきた女の子が、気分が悪くなって寝ちゃったんですね。

ママダ ええ、寝ちゃったんです。

桐島 あなたと？

ママダ いえ、私はもう起きてましたから。

桐島 パンツひとつになつて？

ママダ や、やだなあ。……いやしくも、僕は教師ですよ。食事を持ってきてくれた女生徒をベッドにひっぱりこんでいやーんいやん、いやもう待てない、駄目、いいじゃないか、ああ、いや、スカート脱がしちゃいや。……なんてこと、出来ませんよ。

桐島 ふんふん。ふーん。

ママダ あ、……あらためて、自己紹介いたします。いろいろお世話になりましたが、私、化学を専門にしておりますママダホシオでございます。

桐島 はいはい。

ママダ この度はとんだ御迷惑をおかけいたしましたでしたが、とりあえず、当校へ転任ということ、よろしくお願いいたします。

桐島 はいはい。私、先程申しました通り桐島です。古典を教えております。それでは学園長の方へごあいさつと、それから転勤の手続きと、今からなさいますか。

ママダ ええ、あの、それから、私が来る前に、女の子が一人来てるはずなんです、その子の転入の手続きの方もよろしくお願いしたいんですが。

桐島 女の子？

ママダ はい。

桐島 いつ？

ママダ 昨夜、こちらの方へ向かわせたんですが。

桐島 夜にですか。

ママダ ええ、何分、いろいろと急な事情がありました。

桐島 真夜中の転校生ねえ。

ママダ あの、(と心配そうに)

桐島 ちよっとお待ち願いますか。学園長の都合を聞いてまいりますゆえ。

ママダ へい。

桐島 (ベッドのシーツをめくりあげる) えい！

女生徒 (猫のマネをする) ニャーゴ。
桐島 何だ猫か。(去る)

不安気なマメダ。…………

女生徒 ニャーゴ。

マメダ 何だ君は。(スカートを渡してやる)

女生徒 ゴロニャン。

マメダ よせよ。

女生徒 (スカートををはきながら) 先生、先生は化学の先生なんですか、先生。

マメダ ええ。

女生徒 それで先生、先生は先生をやり、先生、先生の先生はえーと先生、

マメダ 何ですかいったい。

女生徒 先生、私、モモコっていうの。

マメダ モモ……コ。何だかイロっぽい名前ですね。

モモコ パチンコ屋みたいだっくてよく云われます。

マメダ ふーん……あのね、モモコさん、あなた知りませんか、昨夜この学園に女の子

が一人来たでしょう？

モモコ 知らないわ。だって九時になると寮の灯は消えてしまうもの。

マメダ 真っ暗になるんですか。

モモコ そうよ。でも寝るわけじゃないのよ。それから司教様と一緒に祈りをするの。

マメダ 司教？

モモコ 園長先生よ。

マメダ お祈りをするんですか。なる程。

モモコ ねえ先生。

マメダ はい。

モモコ ブラジャーとめて下さらない？

マメダ ええ？

モモコ ブラジャーの金具(ホック)、変になったみたいなの。ねえ、ちょっと、とめてよ。

マメダ いったい毎晩何のお祈りするんですか。

モモコ おちちが大きくなるように。

マメダ まさか。

モモコ 本当よ。でも、私、チクビばかり大きくなっちゃって。ねえ、ちょっと見てみる、私のチクビ。

マメダ いや、いいです。

モモコ じゃあ、ブラジャーとめるよ。

マメダ はいはい。じゃ、あのつい立ての向こうに行きましょう。ふんともう。

二人がつい立ての後に消えると、別の女生徒と、その母親らしい女 が、現

われる。

母 ナナコや、そんなに無理云うもんじゃないよ。

ナナコ でも母さん、私、帰りたいんだもん。

母 (辺りをうかがって) 今日、ここへ来るんだって大変だったんだよ。わざわざ園長先生の所へ金魚を届けにくる用事を作って、やっとこ来たんだからね。

ナナコ 私が飼ってた金魚(トト) 元気にしてる？

母 ええ、元気だよ。

ナナコ 背およぎなんかしてない？

母 してませんよ。

ナナコ 猫に取られたりしてない？

母 大丈夫だよ、仲いいんだから。こないだなんか、猫が金魚鉢に手えつつこんでるから、何してんのかなって覗いてみたら、金魚の背中を搔いてやってんだよ。かゆかったんだねえ背中。

ナナコ 母さんは？……背中かゆくない？搔いてあげようか。

母 私はいいよ。

ナナコ 遠慮しないでよ。昔は、私が背中搔こうって云ったら、あいよって、背中こっちに向けたのに。

母 そうだったね。でも今はいいよ。

ナナコ じゃあ、私の背中搔いて、(背中を向ける)

母 よしよし、ここかいここかい。

ナナコ もちよつと右。そう、そこそこ。

母 おまえ、少し太ったねえ。

ナナコ 私、食欲あるのよ。悲しいわ。

母 いいことじゃないか。

ナナコ ううん。私、面白くないことがあると、すぐおなか減るの。イライラするとすぐおなか減るの。

母 食べればいいじゃないか。

ナナコ でも私、楽しくない。

母 今に楽しいこともあるさ。

ナナコ 私、変になっちゃいそうよ。

母 そんなことあるもんか。

ナナコ 私、帰りたい。

母 後少して卒業じゃないか。

ナナコ 卒業したらどうなるのかしら。

母 りっぱな社会人になって、

ナナコ 私、社会人より、金星人になりたい。

母 何を云うんだい。

ナナコ 私、OLになって、社内結婚して、毎夜毎夜赤んぼ作って、亭主に飽きた頃に若い男と出来ちゃって、また赤んぼ作っちゃって、それで人生相談に投書したりするん

じゃないかしら。それならいつそ金星人になって、
母 金星人なんていないよ。
ナナコ バカね母さん、金星にだって土星にだって、知的生命は存在するのよ。
母 難しいことは、おつ母さんには分かんないよ。
ナナコ 私たち毎日毎日たくさんたくさん勉強するのよ。
母 そりや学生さんだもの。
ナナコ それから、みんなで手をつないで赤い月を呼ぶの。
母 何だいそりや。
ナナコ 他人（ひと）にしゃべっちゃ駄目よ。赤い月が登ると気分が良くなるのよ。
母 へーえ。
ナナコ そうしたら、金星人や土星人や火星人に会えるのよ。
母 火星人って、あのタコの人（は）っちゃんかい。
ナナコ ううん、もっとハンサムよ。
母 へーえ。
ナナコ でも私、やっぱり変になりそう。
母 （心配そうに）しっかりしなきゃ、ね。
ナナコ 私って空気をつまった石ころみたい。気分がふわふわしたり、水の中に沈んだ
ようになったり。
母 若いうちはそうやって悩むものだよ。
ナナコ そうなの悩むの。そしたらおなかへるのよ。
母 食欲があるのは健康な証拠だよ。
ナナコ 私、太っちゃって。
母 気にすることなんかないさ。
ナナコ 私、帰りたい。
母 結局、ぜいたくなんだよお前は。
ナナコ 私、金魚に生まれたかったわ。
母 人間が一番いいんだよ。
ナナコ どうして？
母 だって、尻尾はないし。
ナナコ 私、運命の星の下に生まれたかった。
母 何だって運命だよ。
ナナコ 私、ダラクしてみたい。
母 もうすぐ大人になるさ。
ナナコ 私、あれもやりたいこれもしたい。
母 何だってやれるさ。若いんだもの。
ナナコ 若いって嘘ね。
母 どうしてだい。
ナナコ だって、トシをとるもの。もし若いってことが、人生の真理（マコト）なら、ト
シなんかとるはずないわ。
母 そうかねえ。

ナナコ 背中のかゆいところを、思いっきりバリバリ搔いてもらう、そんな気持ちのいいこと、人生にもあるかしら。私変になりそう。赤い月が見たいわ。ああ、やっぱり私、金魚になりたい。

母、そうつと離れる

ナナコ ㇿ私は金魚

アイスコーヒーの朝

眠る気体の中を泳ぐ

私は金魚

背およぎが 好き

水の底にうつつた

青い空を見るのが好き

私は金魚

コップの中の

私は金魚

モモコ ナナコさん。

ナナコ あら、モモコさん。

モモコ またおセンチになってるの。

ナナコ 母さんが来たことは内緒よ。

モモコ いいわよ。金魚屋さんに化けてきたんでしょ。

母 金魚ーえ、キンギョオー

モモコ チリ紙交換屋さんだったけ？

母 御不要になったチリ紙を今日の新聞とお取り換えいたします。こちらはチリ紙コーカ
ン車で

モモコ あっそうか、物干し竿売ってるのか。

母 竿屋くサオ竹え！

モモコ 花火屋だったかしら。

母 玉屋く、カギ屋く

ナナコ やめてモモコさん。母はノリやすい性格なんだから。

モモコ 天性のものね。

ナナコ そう、焦燥を催す楽天性ってやつ。

母 ラクテンくん、ラクテン！

ナナコ もういいわ母さん、見つからないように帰ってね。

母 じゃあ、元気でね。また、手紙を書いとくれよ。

ナナコ 私の金魚、猫に気をつけててね。

母 あいよ。それじゃあ……

母、去る。

モモコ いいわね、内緒で会いに来てくれるなんて。私んところなんか、
ナナコ モモコさんところは、そう云えば、お父様もお母様も……

モモコ そう。……健在なのよね。早く、くたばらないかなあ。

マメダ これこれ、何てこと云うんですか。

ナナコ あら、この人は？

モモコ 新しい化学の先生よ。

授業を知らせるチャイムが鳴る。

ナナコ あら、バッドタイムだ。

モモコ 次は国語だあ。

ナナコ 私はグラマーよ。(と胸を手で持ちあげる)

二人、飛び出していく。

マメダ あのっ(と二人を呼びとめて)

二人 え？

マメダ 新しく入った女の子、いませんか。

二人 さあ？(去る)

マメダ サーか。サーねえ。サーロインステーキか。食いたいなあ。

と、またあのオウムのような声

——タスケテ、タスケテヨ……センセ、センセ、センセ

マメダ (キョロキョロ)

桐島が入って来る

桐島 お待たせ至しました。これから、校内を案内かたがた、園長に会って頂きます。

マメダ あの、転校生の件は？

桐島 真夜中のねえ……桃李不言下自成蹊(桃李言(ものい)はざれども、下(しも)

自(おのずか)ら蹊(こみち)を成す)とは申しますが、我校は真夜中に転校生を受

け入れたりいたしません。

マメダ ええ、でも昨夜道に迷った時、この灯りが見えましたもので、それを目印に進

むように云いつけたのですがねえ。

桐島 さあ。……

マメダ サーですか。

桐島 サーロインステーキ食べたいですね。

マメダ ええ。

桐島 さ、参りましょ。

と、また、オウムの声。

——センセ……センセ……センセ……

マメダ あれは何です。オウムの声のように聞こえるあの声は。

桐島 オウムです。

マメダ オウムですか。え？

桐島 放し飼いにしてあるオウムなんです。すぐに口真似するんですよ。

マメダ 助けてなんて云ってますが。

桐島 生徒たちがイタズラして教えたんでしょう。

——センセ……タスケテ……マメ……

マメダ え？

——タスケテ、マメママ……

マメダ マメママ？……

桐島 さ、参りましょう。

マメダ はあ。

桐島 疑心生暗鬼ですよ。

マメダ ええ。……しかし、オリエ君は何処へ行っちゃったんだろう。

桐島 え？

マメダ いえ、何でもありません。

とオルガンの音。

桐島 ああ、オルガンだ。先生、あなたいい日に転任なさいました。

マメダ え？

桐島 聞こえませんか。オルガン。

マメダ ええ聞こえます。

桐島 音楽室で誰か弾いてるんですよ。今夜は我校の星祭りなんです。ですからケイコシ
てるんだなあ。鶏鳴狗盜……客有能為鶏鳴者 鶏尽く鳴く。遂に伝を發す。

……客有能為狗盜者 秦の藏中に入り裘（きゆう）を取りて以て姫に獻ず。

……生徒有能為風琴者ですな。

マメダ 漢字ばかりですね。

桐島 星祭りは中国伝来ですからね。

——オリエ……

マメダ え？

桐島 何か？

マメダ 今、オウムが何か云いませんでしたか。

桐島 さあ、私はオルガンの音を聞いてましたから。

桐島、先に出て行く。

マメダ オリエ君……君は何処にありや。

マメダも行く。ドア閉まる。と、またオウムの声。

——センセ、センセ、タスケテ、タスケテ、オリエ、オリエ、マメダセンセ。

オルガン悲痛に歌って、

暗転

景二

あの白衣の男、（実はこの学園の教師だったらしくて）が女生徒を相手に講義をしている。……校舎の中庭の昼下り。

白衣 つまりレムリアというのはね、レムール、きつねざるのことなんです。ですからレムリア大陸の名付け親は、このまえものべた通り博物学者のフィリップス・R・スクレーターなんです。でも、ここで人類が発祥したと推論したのはドイツのヘッケルですね。それでその推論にもとづいて、オランダの医師でデュボワっていう人がジャワ島に行って直立猿人を発見したんです。ですから、すべからレムリア大陸というのは今のインド洋にあったと理解できますね。

女生徒1 先生、ジャワ島って、ジャワカレのジャワ島ですか。

白衣 そうです。

女生徒1 それじゃあ、レムリア人はカレーを食べてたんですか。

白衣 そうとは限りません。ハヤシだって食べてたでしょう。

女生徒2 直立エンジンてどういうエンジンなんですか。

女生徒3 ターボですか。レーザーですか。

白衣 エンジンというのは猿人、猿の人の猿人ですよ。

女生徒4 じゃあ、ターザンだ。

女生徒1 それじゃあ、チーターも一緒に見つかったんですか。

女生徒2 チーターとターザンがでてたというのは本当ですか。

女生徒3 きつねざるって、きつねうどんとざるそばのハーフなんですか。

女生徒4 ねえ、ターザンも夢精するのかしら。

白衣 先生はそういう質問には答えませんですよ。

女生徒1 つまり、レムリアというのはジャワ島にあった大陸で、人間の祖先がきつねざるを発見したんですね。

女生徒2 それが今のドイツ人とオランダ人の発祥の地なんですよね。

女生徒3 その直立猿人の名前がフィリップス・ヘッケル。

女生徒4 それでえーと、えーと、何よ、私の云うこと無くなったじゃない。あーん、セ

リフが欲しい。

白衣 あなたたちの耳はどういう耳なんでしょうねえ。

女生徒1 ですから博物学の推論にもとづくとインド洋はオランダの医者ですね。

白衣 あのね、無理に利口なこと云わなくてよろしい。そんなことすると破綻します。

女生徒2 先生、今度はムー大陸について話して下さい。

白衣 お、まともなシチモン、よろしい、では次は人類文明発祥の地、ムーについてお話ししましょう。

桐島がマメダを連れて通りかかる。

白衣 ムー大陸は今からおよそ一万二千年前に太平洋に沈んだ大陸です。ここは人類最古にして最大の文明がありました。ここに人類が誕生したのは五千万年以上も昔のことです。およそ七万年程前、ムーは全世界を植民地化し支配したのです。ですから、私たちは皆ムーの子孫にあたるわけです。

女生徒2 すると私たち、メーとかモーなんですか。

白衣 はい、あなたはアホね。ムーの人々は大陸が沈んでしまう前に、宇宙に逃げのびました。それが、今の金星人か木星人になったとき。めでたしめでたし。

マメダ 授業なんですか。

桐島 ええ、ネジトビ先生の専門は宇宙考古学と現代国語です。ずいぶん風変わりな授業風景でしょ。でも、当学園ではあたりまえなんです。当学園は自由な学問をモットーにしているんです。

マメダ でも、まさか今の話は作りごとでしょうね。

桐島 あら、ご存知ないんですか。私たちムーの子孫ですよ。

マメダ ええ！

桐島 もうすぐ先生にもお分かりになりますわ。金星人や木星人が存在することも。

マメダ まさか。

ネジトビ これは副園長。

桐島 紹介しましょう。こちら新しい化学の先生でマメダさん。

マメダ よろしく。

ネジトビ ネジトビサスケです。

マメダ あれ、あなた地底王国の……

ネジトビ あ、いやあ、あれはその、私のライフワークでして、ムーの子孫は宇宙だけでなく、土ん中に穴掘って沈没から逃げたんじやないかと考えておりました。

マメダ うどんをどうも。

ネジトビ いえいえ。うおうお。

桐島 では参りましょうか。

マメダ はい。……あの、君たち、

女生徒たち、マメダを見る。

マメダ 昨夜、君たちのところに、君たちと同じくらい女の子が訪ねてきませんでしたか。

女生徒たち顔を見合わず。

桐島 また、転校生のことですか。

マメダ ええ、ひよつとして、この学園のどこかに。

桐島 何かあったんですか、夜中ここに来なくっちゃならないなんて。

マメダ いえ、ちよつとした急用で、一人してやってきただけです。……知りませんか。

女生徒3 私、何だか昨夜、校庭で人を見たような。……

女生徒4 そう云えば私もトイレで。

女生徒1 私は屋上で。……

女生徒2 私も廊下で。……

桐島 一犬吠影 百犬吠豊 ですなまったく。

マメダ 何ですか。

桐島 一人がいいかげんな事を云うと、回りもそれに合わせていいかげんな事を言い出す

人間の心理ですよ。あなた方、破 山中 賊 易 破 心中 賊 難 ……ですよ。少し

引用が違うかも知れませんが、とにかく、いいかげんな事を云っちゃイケマセン。

ネジトビ その通り。さあ授業を続けよう。えー、芥川龍之介は、芥川賞がとれなかった
ので、

女生徒1 先生、急に現国になっちゃいました。

ネジトビ 構いません。宇宙考古学なら、今夜星祭りですつぷりやれるでしょう。

女生徒2 そういえば私、準ビ委員なんだ。先生、お先に失礼します。(去る)

ネジトビ はい。えー、太宰治が昔、猿飛佐助に忍術を習った時、指先から赤い糸を出して、女をひっかける赤糸の術を覚えたと云われておりますが、あれは坂口安吾が得意
で、鉄人二十八号と闘った際には……

と、講義をしながらネジトビたち行ってしまう。
オルガンの音が遠くに聞こえる。

桐島 七夕祭りというのは、誰でも知っているように、一年に一度アルマイルとベガが天

の川を渡って逢瀬を楽しむという中国の説話に基づいた日本の年中行事なんです、

私どもの星祭りはもつと古い伝説によって成立しているんですよ。

マメダ はあ。

桐島 超古代、ムーの人々は婚姻の吉兆を一年に一度、星で占ったのです。それが正しい

男女の結びつきか否かを、星の裁きに託したのです。

マメダ へえー

桐島 一族の者に害を与える結びつきは、ベントラ様がゆるさなかったのです。

マメダ ベン? ……

桐島 ベントラ様です。ほほほ……今にわかりますわ。

マメダ はあ。……………

桐島 (口づさむ) ♪我が眼は見たり

天界の……………

暗転

景三

聖ルナキスト学園々長室。

柵に金魚鉢。金魚があぶくを吐いている。それらしい机。机にはオウムがとまっている。中央の突きあたりにドア。ドアには、「立入禁止、こわい部屋」と記されたカードがぶらさがっている。

レポーター出る。

レポーター ここが聖ルナキスト学園の園長室です。よく清掃がいきとどいていて、机の上にはホコリひとつありません。ずいぶんと高い所にあるらしく、窓からはあの深い森一帯が一望のもとに見渡せます。金魚は平和そうにあぶくを吐き、机の上にはオウムがおります。一見何のヘンテツもない部屋……………ですが、妙なことに奥のドアには奇怪なメッセージが記されています。いわく、……………立入禁止。こわい部屋。……………何やら意味ありげです。ここにもうすぐ、あの二人、マメダと桐島がやってまいります。私も、着替えねばなりません。

と背広を脱ぎすて、まるでバチカン国王の戴冠礼服のような、ハデな 衣装を身に付ける。

レポーター レポーターをつとめておりました私、実はこの学園の園長で、サンタ・ルナックと申します。

オウム センセ、センセ、タスケテ、センセ。

レポ(サンタ) まず、問題はこのオウムです。

オウム ハラヘッタ……………タスケテ……………

サンタ (電話する) あ、もしもし、こちら聖ルナキスト学園ですが、ちょっとおうかがいしてもよろしいでしょうか。いえいえ、伺うと申しましたが、お訪ねするわけじゃございません。いえ、お訪ねはするんですが、はい、そうです。訪問するわけじゃなく、質問する方の伺うなんですはい。えーと私、園長のサンタ・ルナックでございます……………いえサンタクロスじゃございません。サンタ・ルナック……………サンダル・バック? いえいえサンタです。はいはい。そうです。えーそれでですね、実は、質問と申しますのは、今ですね、私の机の上にオウムが一羽いるんですよ。そのオウムはですねえ、えーとまあ普通のオウムなんですがね、はい。ええ、言葉を少し、はい、センセとかタスケテとか、はい云いますが、ええ。

と、ノックの音

サンタ はいどうぞ。いえ、こちらのこと、はい。

桐島とマメダが入って来る。

サンタ それで、私、そのオウムを見ておりましたね。

桐島 おや、園長、お電話の最中でしたか。

マメダ あ、オウム……

桐島 このオウムなんですよ、さつきから変な声で鳴いてたのは。

サンタ いや、そうじゃないんです。そういうことじゃないんです。オウムがどうしたこ
うしたってことじゃなくてですね。……

桐島 (わざと電話口で) 私、オウムよ、私、オウムよバカバカ。

サンタ え、いや、今のはオウムじゃなくてオウムのまねの、いえいえ、ふざけてなんか
いません。

桐島 オウムだぞー。カアーカアー。只今オウムの試験中、カアーカアー。

サンタ こら君！冗談はやめろ。いえ、こちらの話で、はいどうも。

桐島 オウム、オウム、オウムの親子は仲良しこよし。

サンタ ちよつと、やめろよ君

電話の向こうは当然、電話を切る。

サンタ あ、切れちゃった。何をするんですか桐島先生。

桐島 すいません。園長先生を喜ばせようと思って。

サンタ こんなことされて誰が喜びますか。

桐島 なんのお話でしたんですか。

サンタ オウムですよ。

桐島 オウムが何か。

サンタ オウムがハラヘッタって云うから電話したんですよ。

桐島 うどん屋へですか。

サンタ 何で。

桐島 出前か何か。

サンタ オウムですよ腹へらしてんのは。

桐島 オウム、うどん食いまひえんか。

サンタ 知りませんよ。

桐島 オウムは何食うんですか。

サンタ 分かりませんよ。だから電話して聞いてみようとしたんですよ。

桐島 (オウムを見て) 何食うのかな。…… (サンタに) 何食わぬ顔してますよ。

サンタ そりゃ君でしょ。

桐島 で、どう云ってみえました。

サンタ イタズラ電話はやめろって。
マメダ さもありなん。

桐島 結局、分からなかったんですか。

サンタ 君の責任ですよ。

オウム センセ、センセ、

サンタ ほらほら、腹へらしてんですよ。

桐島 分かりました。私が電話しましょう。もしもしいはい。あのね、野生のオウムは果物だけ飼われてるのはヒマワリの種を食ってるんだって。

サンタ おい、いつの間に電話したんだ。受話器をあげるところも、ダイヤルを回すところも見えなかったぞ。

桐島 省略したんですよ。本題に入ります。マメダ先生をお連れしました。

サンタ これはこれは、お眼覚めになりましたか。

マメダ マメダです。

サンタ 園長のルナックです。サンタ・ルナック。

マメダ 現代の聖人として名高い先生ですな。

サンタ ええ、まあ。

オウム アホ、アホ……

桐島 この鳥。しめましようか。

オウム タスケテ、タスケテ、

サンタ まあ、まあ、いやいや、驚きましたよ。あなたが森の中でお倒れになっていた事を聞いた時は。何ですか、暴漢に襲われたとかで。

マメダ はい。

サンタ しかし無事で何よりです。それでは早速転任届けにサインして頂きましょうか。

マメダ はい。

サンタ (書類を出す) ここんとこね。

マメダ はい。……ずいぶんとヘンテコな文字ですな。

サンタ 古代ラテン語ですよ、さ、お気になさらずに。さあ。

マメダ はい。

オウム ダメダメ、センセ、ダメヨ。

マメダ え？

桐島 やっぱり、しめましようか。

サンタ さあ。どうぞ。

マメダ はい。(と、サインする)

と、その書類をつかんで、オウムが逃げる。バサバサ……

サンタ あ、こら、

桐島 こらこら、

サンタ おい待て！

桐島 ちきしょう、しめてやる。

オウムを追って、二人とも出て行く。マメダも、行こうとするが、

——センセイ。

マメダ え？……変だな。今のはオウムじゃなかったぞ。

耳を澄ましてみる。と、キトンキトンと機織りの音が聞こえてくる。

マメダ この音は？……

それは確かに「こわい部屋」から聞こえてくる。音は次第に大きくなり、まるで歌の調子をとっているかのごとく聞こえ、果して歌が、聞こえてくる。

りはあたあ おおるうは

みめうるわしゅう

むうらの おなごしのわざよ

おりたる はたを

みに つけもせで

キトン キトン

マメダ その声は、ああ、その歌声は、オリエ！オリエ君！

宙空、左右に星が輝き、「こわい部屋」の扉がゆつくりと開く。と、
と、それを踏んでいるオリエの姿が見える。 機織り

マメダ オリエ君。

オリエ センセ……（ニコリと微笑んで）

マメダ、そこへ行こうとする。と河の流れる音。まるで、二人の間
にあるように、マメダ立ちすくむ。 に、河

次第に辺りは暗くなり、小さな星が光り始める。

まるで天空の星の世界のように。

マメダ オリエ君！

オリエ さあ、早く渡っていらして下さい。センセ。さもないと月が登ってまいります。

あの赤くて妖しい月が登って参ります。そうしたら、また私たちの星が月の光で見えなくなってしまうわ。さあ早く、センセ……月の光がこぬうちに。月の光が見えないうちに。センセ……（微笑む）

手をさしのべるオリエ。

マメダ　しかし、何というか、僕の目の前に河が流れてるんです。ゴオゴオと音をたてて。
……

オリエ　男と女の間には深くて暗い河があるわ。
マメダ　そんな、歌の文句じゃあるまいし。けれど、しかし、この河は……

ゴオオ……という河の流れ。

オリエ　思いきって飛びこんで。そして泳いで渡ってきて下さい。

マメダ　でも、僕は、泳げないんです。

オリエ　それじゃあ、沈んで、河底を歩いてくればいいじゃない。

マメダ　なる程。ようし、それじゃあ。

と、マメダが飛びこんだ。

それが合図かのように、星々は消え、こわい部屋の扉は閉じ、オリエ　の姿も見えなくなった。河の流れの音も、もちろん一滴の水もない　もとの園長室で、マメダが鼻をつまんでゴボゴボとおぼれている。

マメダ　うう、苦しい……ゴボゴボ。酸素ボンベくれえ……

オウム　（書類をマメダの頭におとして）センセ、センセ、マメダセンセ。オリエ、オリエ、タスケテケテケテ。（とマメダをつつく）

マメダ　ハッ……ど、どうしたんだ。……オリエ君、何処へ行ったんだ。

オウム　オリエ、オリエ、タスケテケテケテ。

マメダ　何だ、オウムか。今のは夢か幻か。……

オウム　サイン、サイン……

マメダ　え、（と、転任届けを読む）　いったい古代ラテン語だなんて……ややつ、ここに
もうひとつ別のサインが……オ、リ、エ、……こっこれはオリエ君のサイン。

これはいったい。

オウム、飛んでいく。

マメダ　そうだ、あのドアの向こう。（と、こわい部屋のドアを開けようとする）

桐島とルナック園長、もどってくる。

桐島　まったくあのオウムのやつ、今度は必ずしめてやっからな。

サンタ　（マメダを見て）あつ、こら、何やつとるんだ君は。（つかまえる）

マメダ　離して下さい。僕は見たんだ。

桐島　何を見たのです。

マメダ　捜していた女生徒です。ここから、機織りとともに現れたんです。

桐島 園長、こんなところに契約証が。

マメダ そのサイン。そのオリエというサイン。それはいったいどういう意味ですか。

サンタ 分かりました。ベントラ様です。ベントラ様がお現われになったのです。

桐島 まあ。

マメダ 弁当屋……？なんでベント屋なんかが出てくんです。

サンタ マメダ君、あなたが見たのも、おそらくベントラ様がなせる奇蹟です。あなたが

この契約証にサインをしたので、ベントラ様がお喜びになってお現われにおなりにお
なったのでおす。

マメダ 契約証？……それは転任届けじゃなかったんですか。

サンタ 何もかも、もうすぐ分かります。

桐島 さあ、参りましょう。今宵の星祭りは、あなたと、そのオリエさんとの記念すべき

お祭りです。

マメダ え！

こわい部屋の扉が開く。

チアガールふうの女生徒たちが歌って踊る。

桐島

η我が眼は見たり

天界の

赤き月よりの使者

空飛ぶ舟に 銀の舵

くねくね くねって

現われる

ベントラ ベントラ

スペース ピー

ベントラ ベントラ

スペース ピー

宇宙で一番 エライ方

桐島とマメダ、すいこまれるように、こわい部屋に入っていく。

サンタ・ルナック園長は、マイク片手にまた例のレポーター調で。

サンタ そうして、マメダホシオと、女生徒オリエは運命的な再会をしたのであります。

それもこれもベントラ様のおかげでありました。ところで、このマメダと、オリエが
うまく結ばれるかと云いますと、ところがどっこいアコリヤコリヤ。そうはベントラ
ゆるさない。この聖ルナキスト学園の星祭りというのが、これが、あれ？

チアガールが二人（実は森と木村）

忍びこむようにしてこわい部屋に入る。

園長もとびこむ。ボタンと扉が閉じる。

暗転

景四

一幕の終わりに歌われた、あの奇妙な呪文のような歌を口ずさみながら、女生徒たちが手をつないで舞台をくるくる回っている。

舞台一方に機織りが、もう一方には、鷲のハリボテが置かれている。

女生徒たち (やがて歌は呪文にかわって) ベントラ、ベントラ、スペースピー

と、舞台は一面の星の世界となる。

ネジトビ 琴座アルファの座標に妖しく美しく輝く星、あれがベガ。アラビア語で落ちゆく鷲という意味です。光の強さシリウスの二倍。太陽の五十倍。あの星が今から一万二千年後には北極星となるのです。そしてあちらがアルタイル。天の川の東岸に光る一等星です。アルタイルは飛び立つ鷲です。あっちもワシならこっちもワシ。ワシとワシです。ではアナタはどっちなのかしら。(頭のネジが完全にとんでいるらしい) 女生徒たち ベントラベントラススペースピー。

桐島が中央に立ちあがる。

桐島 さあ、ベントラ様を呼びましょう。赤い月を登らせて、お空の星が消えたなら、ベントラ様がやってくる。ベントラベントラススペースピー。

園長がマイク片手に現われる。

サンタ ベントラ、ベントラ、スペースピー。この呪文のような言葉は、レドルナックス・マルと呼ばれている宇宙語なのです。人々はこの言葉を唱えることによって、何者かとコンタクトしようとしています。旧暦七月七日の夜。皆さん御存知の星祭り、七夕の夜です。ところがこの中国から伝来した織姫と彦星のお祭りは、実は古代文明が私たちに残した儀式のひとつであったのです。それは愛の裁きの儀式です。今宵その儀式の中心となる人物というのが、マメダホシオと女生徒オリエの二人なのです。彼等はおかつにも、この契約証にサインしたため、ここに立たされることになりました。ホッホ。運命は、真夜中の聖ルナキスト学園に女生徒オリエが転校を申し出た時に決定されたのです。

女生徒たち ベントラベントラススペースピー。

サンタ ベントラ、ベントラ……スペース……パイ。

オリエが機織りの側に、マメダが鷲のハリボテの上に姿を現わす。

マメダ オリエ君！

オリエ 先生。……私、転校届けだと思って、何だか変な契約証にサインしちゃったんです。そうしたら、あの部屋の中に閉じ込められて。……

サンタ 二人は今宵天の川をはさんで出会える日をどんなに待ったことでしょうか。一年です。三百六十五日です。さあ、この悲恋をベントラ様に捧げましょう。ベントラ様はきつと来る。そして二人をお裁きになるでしょう。

マメダ 裁く？

桐島 (契約証を見せて) ベントラ様との契約です。これは愛の裁きです。

マメダ いいかげんにこんな馬鹿気たことは止めたらどうなんです。

桐島 少しも馬鹿気ちやいません。遠い私たちの御先祖は、現在は海中に没した大陸、ムーの地に生まれました。そして、その時からベントラ様の御指導を受けていたのです。あのイースター島の巨人像を作ったのも、ベントラ様の教えを受けたムーの人々です。いいえ、モアイの像ばかりではありません。エジプトのピラミッドも、ペルーのサクサイワマン大城塞も、ナスカの巨大図形も、トプカピの古地図も、バグダッドの古代電池も全て、ベントラ様の教育のもとに成しとげられたのです。

女生徒たち ベントラベントラスペース！

マメダ じよ、冗談じゃありません。そんなことはデタラメです。皆さん、みなさん聞いて下さい。イースター島のモアイの像も、エジプトのピラミッドも、人類の知恵と労働が成した建造物です。テコとコロの応用です。皆さんは学校で学んだじゃありませんか。小さな力で大きなものを動かす。定滑車や動滑車のことも、輪軸のことも。それらは昔からあった人間の知恵です。古代人はそんなにバカじゃありません。ナスカ平原の図形にしても、基本的な測量術さえあれば、私たちにだって描けるはずですよ。何もかも、人類の工夫と努力です。

桐島 ではその人類はどうやってその知恵を手に入れたのでしょうか。それこそベントラ様のお力なのです。

マメダ いいえ、私は一人の化学の教師として皆さんに云いたい。分からないことを分からないものの力のせいにしてはいけません。みなさんが、日々学んでいるものは何ですか。学問とは何ですか。研究とは何ですか。それは勇気ではありませんか。立ちふさがる巨(おお)きな疑問符と闘う勇気ではありませんか。

赤い月が登ってくる。

桐島 偉大なる人類の救い主よ。地球に人間をもたらされた太古の知的生命よ。

マメダ 赤い月……皆さん、あれは奇怪な現象でも何でもありません。あれは公害によって大気に汚染が生じ、月の光のスペクトラムが変化して赤い色の波長が眼に見えるのです。

女生徒たち ベントラベントラスペース！

桐島 ベントラ様がやってきました。皆さん、ベントラ様が。(空を指さす)

生徒たち空を見る。

アダムスキー型UFOが現われる。

カ「わが眼は見たり〜」の合唱

UFOから手をふりながら誰かおりて来る。それは胸にナイフを突き 刺した
ままの校長だ。

校長 ベントラーベントラー

マメダ 校長！

マメダの両腕をチアガールの二人が押える。

マメダ あ、お前たちは。……

云わずもがなそれは森と木村である。

二人 そうだ俺たちだ。

校長 ベントラーベントラー

マメダ 正体はこれか、弁当屋！校長 さあ、皆さん、今夜もベントラーがやってまいり

ました。今夜は年に一度の星祭り、私、皆さんに弁当を持ってやってまいりました。

生徒たち キャーキャー

弁当を投げる校長。まるでUFOのように弁当が宙を飛ぶ。

校長 世界各地に出現するUFOはこの弁当なのです。さあ食べなはれ。おいしおまつせ。

生徒たち、奪いあつて弁当を食べる。

マメダ やめろ、やめるんだ。そんなもん食うな。

校長 どうしてですか、若者はみな空腹なのです。

生徒たち 私たちハラペコだもん

マメダ ああ、教養と栄養がどこかですりかわってしまったている。

桐島 ベントラー様、愛のおさばきの方はどうしましょう。

校長 そうでした、そうでした。それでは今宵結ばれた二人をこれへ。

オリエとマメダが引っぱり出される。

オリエ 先生！

マメダ オリエ君

校長 マメダ君、オリエさん、残念でしたね。君たちは森をひとまわりしてもとの高校に
もどってきたのです。サンタルナキスト学園などというものはこの世界のどこにも存

在しないのです。それは一年のうちたった一日だけ、旧暦七月七日の星祭りの日にだけ、全学園をあげてのイベントの中に登場するのです。

マメダ そんなバカな。

桐島 美しい夜ですわ。全世界の学校という学校が今夜はサンタルナキスト学園となって、空想の星祭りをくりひろげるのですよ。

マメダ 空想、いや、これはもはや妄想だ。オリエさん、あなたはこんな星祭りがあることを知っていたんですか。

オリエ いいえ。

桐島 知ってるわけありません。彼女もあなたも今夜の星祭りのために準備されたいけにえなんですよ、ホホホ……さあ、おさばきを。

校長 よろしい。では弁当十人前の刑にいたしましょう。

桐島 弁当十人前の刑、

全員 恐ろしい……

マメダ 何だそれは。

桐島 食べるんですよ、あなた方二人で十人分の弁当を。

マメダ 食ってたまるか。

桐島 それが食っちゃうんだよなあ。それ！

二人がかりで特大の弁当が運ばれてくる。

オリエとマメダは正座させられ、そのヒザの上に弁当が積まれていく。あたかも石積みイシツミの刑のごとく……

校長 さあ食べ！食べば楽になるぞ。

マメダ くそ、これが弁当十人前の刑罰か。

校長 ほら食べ、やれ食べ。

マメダ 食ってたまるか。食うんじゃないぞオリエ君。

オリエ はい。

桐島 ああ、愛とはこのように重いものですね。感動しちゃうわ。それもつと積んじやえ。

マメダ こんなものが愛の重みであるはずがない。これは、この重さは、この苦しみは、これはこれ！

オリエ 先生、私、分かります。こういう重さ私、この重さにおぼえがあるんです。

桐島 いいえこれこそ愛の重さです。いえ重さの愛とでも申しましょうか。それ、もつと積んじやえ。

マメダ オリエ君、がんばれ、がんばるんだ。食っちゃ駄目だ。

その時オルガンの音がする。

桐島 誰だ！オルガンなんか弾いてるヤツは。弁当食う時にオルガンなんか弾いてるバカは誰だ！

と、宙空にオルガンが現われる。

女生徒たち あ、オルガンだ。誰もいないのにオルガンが歌っている。

と、オリエ、ヒザの上の弁当を持ちあげていく。

オリエ むむむ……先生！

マメダ オリエ君。

オリエ 持ちあげられます。持ちあげてください。

マメダ それは君が力持ちだからでしょう。

オリエ いいえ、こんな弁当のひとつや二つ。私、がんばります。ですから先生もがんばってみて下さい。

マメダ ようし。むむ……

二人とも弁当を持ちあげる。

弁当から教科書やら問題集やら参考書やらがこぼれ落ちる。

マメダ 見るがいい。これが愛の重みか、重さの愛か。

オルガンが着地する。

マメダ オリエ君。これはひよつとすると夢なのかも知れません。あなたはグランドでオルガンを弾いていて、僕はそのそばで眠っている。そして夢を見ている。きっとそうなんです。あなたがオルガンを弾き終わると眼覚める。きっとそんな夢なんでしょう。

オリエ 先生。

マメダ さあ、オリエ君。弁当なんかステちゃって下さい。そしてオルガンをお弾きなさい。たとえ真つ赤な月が出て、星の楽譜が消えてしまっても、オルガンを弾き続けて下さい。どうかこの夢に僕がオトシマエをつけるまでは。

オリエ おっしゃるようになっています。

オリエ、オルガンを弾く。マメダは弁当を頭上高くさしあげて、

マメダ 僕は化学の教師です。少なくとも科学者の一人です。ですから、赤い月やUFOやムー大陸の話をおいそれと信ずるわけにはいきません。しかしそんなものを夢だと信じこんで、重い苦しい弁当を食わされているあなた方に僕はハッキリと宣言しよう。今、一人の教師が女生徒の弾くオルガンを聞きながら、恋の道行きを夢見ている。理想の学園を求めて旅する道行きを夢見ている、そしてその教師はその夢を、そんな甘い夢を、信じているのだと。

理想の学園、そんなものが本当にあるものかどうか僕にだって分からない。けれど、

もし、真夜中の暗い森で、道しるべのように灯る光を見つけたら、戸を叩いて転校させてもらいましょう。それはひよつとするとまた同じ学校かも知れません。しかし、教師と女生徒の恋の道行きを学問させてくれる学校が、二人の愛しあえる学校が全くないとは思えません。あの星ですら、一年に一度天の川を渡れるかも知れないという、可能性のうちに動いているのだから。……

赤い月が沈んでいく。人々が姿を消す。

オリエ 先生、見えました。あそこ、あそこに灯が見えました。

マメダ、弁当を投げすて、オルガンに駆け寄る。

オリエ 先生、あそこへ行きましょう。そして、戸を叩きましょう。

二人を乗せたオルガンが宙空に舞いあがって行く。

レポーター出る。

レポーター これでの不思議な物語はおしまいです。マメダホシオとオリエの経験したことが、現実のできごとであったのか、それともオリエの弾くオルガンを聞きながら、マメダホシオが見た幻想なのか、それはよく分かりません。それはまあ星にでもたずねないことには分からないことでしょう。この、楽譜のような星たちに。……

コーラスで「夜よ止まれ」(ぶろろおぐで歌われたもの)が歌われる。

えびろおぐ

校庭でオリエがオルガンを弾いている。半ば眠りながらそれを聞いているマメダ。オルガンを弾き終えて、

オリエ 先生、先生、マメダ先生！

マメダ え？

オリエ 最後の一曲弾き終わりました。オルガンをかたづけけます。手伝って下さい。
マメダ ええ。

二人でオルガンを持ち上げる。と流れ星。

オリエ あつ、流れ星。お祈りしちゃおつと。ゴニヨゴニヨゴニヨ。

マメダ 何をお祈りしたんです？

オリエ ひ、み、つ。……

二人、ニコニコと笑いながらオルガンを運んでいく。

★映画「ロッキーホラーショー」を参考にいたしました。